

日本ボストン会会報

発行者 日本ボストン会事務局

日米関係とボストン 関場誓子

人材バンクとしてのボストン

ハーバードやMITといったボストンの学術機関から、これまでに、多数の学者が政権入りしてきている。現クリントン政権でも、つい最近まで、ナイ・イニシアティヴで知られたジョゼフ・ナイやエズラ・ヴォーゲルといった人たちが活躍していた。今回は、これらのボストン関係者の中で、米国外交にもっとも強い影響力を及ぼしたヘンリー・キッシンジャーを取り上げたい。キッシンジャーは、ニクソン大統領の時代に、国家安全保障担当の大統領補佐官として活躍した人物であり、外交史では、中ソとの間に緊張緩和、いわゆるデタントという時代を築きあげた人物として知られている。それでは、そのデタントは一体どのようにして構築され、またその過程でわが国との関係にどのような波紋を投げかけたのであろうか。

デタントの時代

まず前者について述べたい。キッシンジャーはデタントを構築する手段として、幾つかの異なる案件を組み合わせるリンケージという手段を用いた。1969年に発足したニクソン政権にとって、焦眉の課

題はベトナム問題であり、同年春までに米軍を撤兵し秘密交渉を実現させるとというのが政権のシナリオだった。そうした戦略を進めるには北越に対する中ソの支援を弱めることが先決で、それには米と中ソそれぞれとの関係改善が必要であった。そのためにキッシンジャーが駆使した4年越しのリンケージは次のようなものであった。

(イ) 米は、中、ソそれぞれと和解すれば、北越への両国の支援が低下し、北越も米との秘密交渉に真剣に臨むようになると考えた。

(ロ) そこで中国にはソ連が中国を攻撃するような場合には米はこれを座視しないと伝え、他方ソ連には米中和解になるかもしれないと示唆した。

キッシンジャーは、ドブレインが中国の脅威の深刻さを訴えてきたことで益々三極外交への自信を強め、ソ連に対し米ソ関係はベトナム情勢次第ということを繰り返した。

(ハ) 折しも国境問題で中ソの緊張が高まった69年半ば、ソ連は、ソ連が中国を攻撃した場合の米の出方を打診してきた。事態を憂慮したキッシンジャーは、ソ連の攻撃が差し迫っている旨をプレ

(次ページに続く)

総会・懇親会のお知らせ

日時： 1996年10月25日(金) 午後6時より8時半
 会場： NEC三田ハウス芝クラブ
 港区芝5丁目21番地7号、電話03-5443-1400
 講演： ボストン・マラソン優勝者 山田敬蔵氏
 歌： 吉野美知子さん
 会費： 当日払 お一人6000円/同伴者 5000円
 事前銀行送金 お一人5000円/同伴者 4000円
 送金先：

申込先：

(日米関係とボストン - 続き)

スに洩らすとともに、パキスタンを仲介に中国に米のシンパシーを伝達した。これに呼応するかのよう

(二) 70年12月の時点のキッシンジャーの戦略は、ソ連に対して当時実務者レベルで交渉していたSALTの打開を働きかける一方、中国に対しては前向きなシグナルを送り続ける(例えば年頭教書に「中国人民共和国」の正式名称を使用)というものだった。中国からは確かな手応えがあり、71年4月パキスタンを通じてキッシンジャー訪中を促してきた。キッシンジャーの訪中の事実は事後劇的に発表され、その際72年初頭にニクソン大統領が訪中するという衝撃的な事実が世界に伝えられた。ドブレイン大使は蒼白になり、数週間後にSALT交渉が前進し始め、今度はソ連が72年春のニクソン訪ソに同意した。

わが国への波紋：ニクソン・ショック

ところで以上のような劇的な政策展開は、それが米国の対中政策の大転換を含んでいたにもかかわらず、十分な事前通報もなしに発表されたという点で、日本に対しては、いわゆる「ニクソン・ショック」と呼ばれる深刻な波紋を投げかけた。外務省づめの記者永野信利氏の著書「外務省研究」は、当時の模様を、「ロジャーズ(国務長官)からニクソン訪中の事前通報があった。ロジャーズは遅れて申し訳ないといっていた」という牛場駐米大使からの電話連絡に、受話器を握っている政府高官の手が震えた」と記している。それまでの日本は、「政経分離」という対中姿勢にもかかわらず、「政経不可分」を主張するアメリカに万難を排して協力してきた経緯があった。それだけに突然の政策転換は、当時の佐藤内閣の屋台骨を揺さぶり、やがてその崩壊へとつながることになったと言われる。

アメリカ側のそうした仕打ちの背景には、繊維交渉における日本の対応へのしっぺ返し説や、キッシンジャーの日本嫌い説等諸説があるが、「遅れて申

し訳ない」とロジャーズ国務長官の言葉の中に、外交の主導権をホワイトハウス(大統領補佐官)に奪われた国務省自身の無念さもうかがうこともできるのではないかと。もっとも、アメリカの対中政策の転換は、日米関係に一時的にはこうした緊張をもたらしたが、長期的には対中政策をめぐる日米の軋轢要因がとりのぞかれたことをも意味し、その後の日中国交正常化への道筋を開くことになるのである。

終わりに

キッシンジャー長官のみならず、アメリカの歴代政権は、ケネディ政権のベスト・アンド・ブライテストと呼ばれた政策集団以来、多かれ少なかれボストンの学界との絆の恩恵を受けてきている。そのように見ればボストンは全米でも極めてユニークな土地柄と言わざるを得ず、その意味で日本としても常に目の離せない、そして大切にしていきたいコミュニティといえるのではないだろうか。

(聖心女子大学教授)

懇親ゴルフ 96年5月18日(土)

富士平原CCで5月18日(土)に開催された。今回は参加者が少なく1組だけであった。、次回は平日の10月31日(木)に開催を予定している。(別項参照)

ハイキングの会

4月20日の高尾山ハイキングは雨天のために中止された。

6月29-30日の尾瀬一泊の旅行は、7人が参加した。(別項参照)

歴史の会

金子幹事の病気のために7月13日の会は延期された。

これまで岩倉使節段関連に限定してきたが、今後は幅を広げて、岡倉天心の研究もしては如何との提案があった。

ポーツマス条約における小村寿太郎(その1)

ニューイングランドと日本の歴史の会WG

藤盛 紀明

1. 序

過日、八重洲ブックセンターや丸善で「小村寿太郎」および「日露戦争」の出版物をチェックした処、10冊程度の本が目にとまった。いずれも小村寿太郎に関する日本サイドから書かれたものが殆どであった。

私のボストン滞在中(1987年から1991年)、ニューハンプシャー州立大学と建設用新素材の共同研究を行った。その時、「ポーツマス条約に興味があるので何か資料は無いか」と相手教授(Civil Engineering)に頼んだところ、良い本があると紹介を受けた。

それは「There Are No Victors Here」(1985年出版)と言うタイトルの本で、副題として「A Local Perspective on the treaty of Portsmouth」がつけられており、現地ポーツマスを中心とする資料から書かれていた。

The Portsmouth Marine Society の出版で、著者はPeter E. Randallである。著者の経歴がこの本には記されていないが、このシリーズでこの本の内容を紹介するので最終回までに著者紹介を行いたい。

著者はこの本の執筆にあたり現地新聞The Portsmouth Heraldや雑誌、単行本、当時の関係者や同時代人へのインタビュー、そしてとくに「日露戦争とポーツマス条約の伝記作家Thomas C. Wilson」の収集資料を利用している。ウイルソン氏は長年ポーツマスに住んでいた人物で、条約発効の1905年以降に

出版された多くの著作は彼の資料を利用していることで知られている。

筆者はこの本を中心としながら、日本の著作も引用し、比較して紹介していきたい。小村寿太郎のポーツマス条約交渉の成功が後の第2次世界大戦の遠因であったとの説もある。従ってこの条約がその後の日米関係へ与えた影響について、米国・ポーツマス側の観点からの資料から抽出できれば幸いである。

2. 小村寿太郎像

この本の表紙に条約調印の時のイラスト画が掲載されている。それによれば図にあるように小村寿太郎は「木下藤吉郎のような猿面冠者」のように描かれている。調印式は写真撮影禁止であったので、ロシヤ側代表団の誰かがこのスケッチをしたとのことである。従ってロシヤ代表のウイットが立派に描かれ、小村をこのように典型的な醜い日本人に描いたのではと疑ってみた。しかしこの本に日本代表団の写真も収納されており、それによれば小村寿太郎はスケッチ通りの真に小柄な人物であった。(写真前列右5人目)。

しかしながら交渉中の日露代表団の写真によれば、小村寿太郎はなかなか威厳があったように思われる。ルーズベルト大統領と一緒に写真もあるが、小柄ながら堂々としていたようである。明治の日本人のすごさが伝わってくる。

(続く)



図-1 調印式のスケッチ



写真-1 日本代表团

日米交流に貢献したハリ－・ケリー博士の今日的意義

日米科学技術交流の問題点を探る

望月敏夫

筆者は最近までハリ－・ケリー(Harry C. Kelly)博士を知らなかったが、2年前の94年4月に、同博士の評伝が英文で出版されたのを記念して、博士の母校であるMITで日米関係に関するシンポジウムと懇談会が開催され、当時同地の日本総領事ということで招待され、日米関係に関するスピーチを行ったのが博士との出会いであった。

今年はそのケリー博士が没してからちょうど20年目にあたる。博士は終戦直後に、マッカーサー元帥の科学顧問として日本に派遣され、爾来、戦後日本の科学技術の復興と日米交流のために親身になって多大な貢献を行い、日本中の関係者から「恩人」として尊敬され慕われた人である。しかし戦後50年星移り人変わり、ケリー博士の名前を覚えている人は極端に少なくなった。

当然のことながら、同博士の名前は米国では日本以上に知られていない。そこで、博士が果たした役割を戦後の日米関係の中で改めて評価し、摩擦が目立つ近年の両国関係の改善に役立てたいというのが、ケリー評伝の英語版出版とシンポジウム開催の目的であった。

読みやすく纏められている英文評伝と多くの有力学者を含む日米関係者が参加したシンポジウムは、この目的達成に役立ち、今後ともケリーの名前を米国内に留めるために有益と思われたが、日米間の受け止め方に大きな相違を観察することが出来た。

すなわち、ケリー博士の功績を高く評価する点で日米関係者の間に相違はない。しかし、日本側はケリーを日本戦後史の良き逸話として多少の感情移入とともに「恩人」のストーリーにする傾向が強い。

これに対して、米国側はむしろ現在の日米関係の中にケリーを置いてその意義を論じようとする姿勢が強く出ており、今や科学技術先進国の日本はケリー時代の一種の甘えを捨て、国際的な責任分担と国際貢献のために努力すべしというものである。

その結果、日米間でも相互に互恵的な交流が可能となり、両国民の相互理解と協力も一層促進されうるとする。そして、これこそがケリー博士が目指し

たものにほかならないというのが米側の論理的帰結であった。

なぜ、日米の間で重点の置きどころが違うのか。これこそ正に、日米の科学技術交流に不均衡が生じ、米側の「持ち出し分」が多過ぎるのではないかという問題に対する日米間の意識の違いから来ているように思われる。

現在この問題は日米政府レベルでも取り上げられており、88年に全面改定された日米科学技術協定では、研究開発や科学技術情報へのアクセスの促進など開かれた研究開発体系を実現することが主目的の一つとして定められた。更に、クリントン政権発足以降は、「日米包括経済協議」において、貿易、金融問題等とならんで幾つかの科学技術関係の分野も対象とされている。この中では従来日米科学技術協力協定の下で議論されてきた「技術のアクセス」の問題が米側の強い関心の下で議論されており、目下その成果を「行動計画」として纏めるべく鋭意折衝が行われている。

具体化に向けての動きで重要なものは、去る7月2日の閣議において、科学技術基本法に基づく「科学技術基本計画」が決定されたことである。これにより、向こう5年間に新たな課題への対応を含む科学技術関係経費を総額約17兆円とすることが決まり、また広範囲な国際交流を展開することが打ち出された。今後は従来の枠にとらわれない特別の配慮がなされることを期待されている。

先般4月のクリントン大統領訪日の際、橋本総理と同大統領は「日米安全保障共同宣言」とともに、「日米両国民へのメッセージ(21世紀への挑戦)」を発表し、この中で日米の若い世代の人の交流を促進することをうたった。特に大学生、学部卒業生、若手研究者等の米国から日本への流れを増加させることを狙っている。これについても、予算上の裏付けを得て早期に実施されることが望まれている。

(文部省大臣官房審議官)

日本ボストン会の皆様に 建部佳代

今回の帰国は11年ぶりなので、“浦島何さん”になってしまうのでは、という不安がありました。慣れない乗物の乗換や切符の扱い方等日本人特有の早いテンポの波に押し流されないように、と気をつけながらすでに9ヶ月もの時があっという間に過ぎ去りました。

日本語の出来ない主人と娘、病気だった母を仙台から呼び寄せて、それにアメリカから連れて来たヨークシャーテリアの世話をしながらの生活を宮崎で始めました。

大きな家も見つかり、環境もよく、青島の海にも近く、山々に囲まれて、新鮮な食物にも恵まれ、毎日大いに楽しんでいるところです。

4月のリサイタルも好評でしたし、そして6月21日には東京・青山での日本ボストン会主催の会で演奏する機会を与えていただき、大変運がよかったと、心から感謝しております。その折りには馴染みのある顔を見出す事が出来てうれしかったです。

11年ぶりに日本で生活してみて感じた事は、若い人と老人が同じくらいにふえて、その上に特に外国人が目立つ程見かけるようになった事です。生まれ故郷の仙台では特にそうでした。

日本には何でもある！よい物が溢れる程あって、“日本人は贅沢だナー”としばしば思います。そして、日本人には何がよくないだろうか、とも。

東京の銀座通りを歩いた時、ふと気がついたのは、以前に経験したような音楽が一軒一軒の店から流れて来ない事でした。あの“騒音”がなくなって、人々で賑やかなのにもかかわらず何となく静かな感じを受けた程です。でも、テレビでプロ野球を見ていてあの応援団の騒々しさには、私の主人でなくても”日本では野球場に試合を観に行く気はしないヨ”と言われても、無理ない事かもしれません。

“住めば都”といえますから、日本の持つ良い面にこれから多々出会うだろう事を期待しています。

又の機会に皆様と再会出来るのを楽しみにしております。

平成8年9月2日

追伸： こちらの方面に向かわれる機会がございましたら、ご一報いただけたらうれしいです。

次期ボストン日本人会会長 田中豊一MIT教授に決定

MIT物理学科教授田中豊一先生は、米年度からのボストン日本人会の会長に選任された。「これまで、多くの先輩、諸先生のご尽力で、ボストン日本人会は素晴らしい会として、成長してきました。その先輩の作られた会を、どのように維持・発展させるか、とても心配です。皆様のご協力とご指導を宜しくお願い申し上げます。」とのメッセージを日本ボストン会に寄せられた。

因みに田中教授は、今年、科学技術革新のアカデミー賞と呼ばれる「ディスカバリー賞」を受賞した。対象になった業績は「高分子ゲル(注)のさまざまな基本原理の発見と、それに基づくゲルの科学技術の基礎の確立」。今回新設された「未来へのテクノロジー」部門での第一回受賞者となった。

授賞式はデズニワールドで催され、全7部門それぞれの部門でノミネートされた候補者36人と家族が全員招待され、最後に受賞者が著名人のプレゼンターから発表されるという、映画のアカデミー賞の形式で催された。企画演出はデズニプロが行った。向こう1年間、氏の写真と業績がデズニワールドに展示される。

田中教授は1946年新潟に生まれ、東京大学で博士号取得後、MIT助手として渡米。1975年に助教授、1982年に教授となっている。この間、フランスのストラスブールで客員教授を勤めた。

教授は70年代の後半に体積が不連続に、数千倍も可逆的に変化するという相転移現象を発見し、その後、幾つかの基本原理の発見をし、ゲルの科学を確立した。その研究は大きく発展されて、生命現象の根本原理や生命の起源の必然性を明らかにしてきた。これらの発見により、人工筋肉、糖尿病患者のための人工臓腑、外界の変化に対応する化粧品、足にぴったりするゴルフ靴など様々な応用が進んでいる。また、特定の分子を認識し、吸着、回収できるゲルが開発され、環境問題のための有用な新しいスマート材料として注目されている。

これらの業績に対し、これまで、仁科記念賞、高分子学会賞、フランスのダビンチ賞、米国のR&D賞などさまざまな賞を受賞している。

(注) 微粒子を含む溶液が集合したゼリー状物質。

レンブラント(1606-69)

二つの肖像画(1665年作)

美術同好会

今年5月の連休に訪れたモントリオールは木々の花のつばみも固く、例年より春の訪れが遅いと地元の人々は言っていた。ボストンから車で5時間半の道のりは移り行く広大な美しい景色に目を奪われていたせいか短く感じられた。

モントリオールの街の中心地は古い石造りの建物と新しい建物が見事に調和し、洗練されていて活気に満ちていた。1860年に設立されたモントリオール美術館は新館、旧館が道路をはさんで建てて居り、便利な街の一角にあった。館内は通りの賑わいをよそに人少なく数々の名品をゆっくりと時間をかけて鑑賞することができた。

中でもレンブラント(1606-69)の晩年の作品「若き婦人の肖像画(1665)」は印象深く今もなお目に焼きついている。

羽根のついた髪の色とほぼ同じヘアバンドをし、地味で黒いドレスを着ている婦人の肖像画のアクセントと言えば、衿回りを縁取った細い布の白である。広い額、大きく見開かれた目、引き締まった口もと、顔全体に光が当り、その表情は生き生きと描かれている。顔の膚色と大きな瞳の黒との対比はドレスの黒との対比にも増幅されて優雅なリズムをつくり出している。

モントリオールからボストンに戻り、幾度となく足を運んだイザベル スチュワート ガーデン美術館を訪れた。ダッチ コーナーのレンブラントの自画像に逢いたかったからである。

1629年の作品、レンブラントの若き日の自画像はファンシーなドレスに身を包んでいた。少し口を開いた表情は鏡の中の自分に自己陶醉している様でもある。彼の顔、肩に落ちる光、そして両の目の回りはマスクをかけた様に深い影がみられる。

何の背景もない空間に華麗な衣装をつけたレンブラント、どんな思いで鏡の中の自分を描いたのでしょうか。

63年の波瀾の生涯の内に描いた600点余りのオイル ペインティング(油彩画)と共に、この二つの肖像画も又、世界の人々の心をとらえ、今なお永遠の生命を得て生き続けている。

(8.27.96 酒井典子記)

尾瀬山行(96年6月29-30日)

ハイキングの会

日本列島に台風が接近を告げるテレビの天気予報。この週末は雨マーク。梅雨の真っ只中なので雨は当然と諦めていたから、今回は強力な「晴れ男と晴れ女がいるから大丈夫」と太鼓判を押されても半信半疑?しかし、29日の朝は陽がさんさん!!!

沼田駅に着くと沼田在住の野村さんからおにぎりとおオレンジの差し入れ。ありがとうございます!沼田駅からバスで鳩町峠へ。山の鼻まで1時間の下り。新緑がとてもしかった。今年は雪が多かった為にまだ所々に残雪がみられた。山の鼻で差し入れの昼食。食後は、尾瀬植物研究見本園経由で今日の宿泊予定地、下田代十字路の原の小屋まで2時間のコース。花を見、小鳥の囀りを楽しみながらのんびり歩く。

尾瀬が原は至仏山、景鶴山、ひうち山、アヤマ平などに囲まれた湿原。5m近い泥炭層が、6000年という長い年月をかけて堆積して出来たもので、その上には「ちとう」と呼ばれる小池がたくさんある。ちとうにはサンショウウオ、イモリ、イワナ等が住みつく。冬は、原一面真っ白な雪で覆われる。

今年は雪どけが遅かったために、雪の下でじっと待っていた花達が咲き出し、いつもであれば6月初めに見られる水芭蕉が丁度満開であった。その他、リュウキンカ、タテヤマリンドウ、ショウジョウバカマ、ヒメシャクナゲ、ワタスゲ、ミツガシワ、ザゼンソウ、ムラサキウラジオツツジ等が見られた。

昨年10月、吉野先生ご夫妻にヴァーモント、ニューハンプシャー、レキシントン等をご案内頂いたが、今度はハーヴァードからご参加下さった吉野先生。先生からは40年前に尾瀬が原にきて長蔵小屋に泊まり、ひうち山に登った事をお聞きした。その時着ていたシャツを今回も着て来られた先生から、懐かしそうに当時のことを伺った。

学生時代ワングル班で山を歩いていた當のご夫妻。われわれパーティの先頭で足取りも軽い。いつも笑いを運んでくれる土居ご夫妻。リーダーとは名ばかりの中野。花を見、イワナを見て立ち止まり、皆の後を歩く。本当に楽しい山仲間の一行であった。

2日目は十字路から、沼尻、大江湿原を通して尾瀬沼へ。三平峠から大清水に着いたが、途中時間に余裕があり、吹き割りの滝に立ち寄り。最後は沼田駅近くのお店に入りビールで乾杯!(中笠紀子記)

ボストンへようこそ (改定版)

Welcome to Boston

本年6月、3年振りに地図や写真を入れて内容を充実した改定版(2千部)が発売された。ボストン日本人会婦人部のボランティアが、主婦の目でボストンにおける生活ガイドブックを編集・制作した。初版本より70ページ増え、300ページとなり、役立つ情報でいっぱい。

日通のご協力で日本でもお分けすることが出来ることになった。頒布価格一部2500円(送料込み)。住所、電話、氏名、部数、期日(海外へ出される場合)を書いてお申込み願います。

申込先:

ブロンズ彫刻家バーンズ郁子さん 故郷山形で個展開催

ボストン在住のブロンズ彫刻家バーンズ郁子さんは、米国における芸術活動に加えて、これまで銀座「和光」や札幌などで個展や展覧会に出品を重ねて来た。

今回は故郷の山形で2回目の個展開催の準備を進めている。11月27日より山形市大沼デパートにて約40点の作品が展示される。

音楽と講演の夕べ 96年6月21日

レディス会主催の第4回「音楽と講演の夕べ」は、6月21日午後6時半より青山アンダンティーノで開催。ボストンからも一時帰国中の吉野耕一先生、増淵夫人のご参加があり、39人が出席されました。

今回は関場誓子聖心女子大学教授から「日米関係とボストン」と題して、ケネディ政権のベスト・アンド・ブライテストと呼ばれた政策集団以来、ボストンのアカデミアが歴代の政権に対する人材バンクとしての絆を保っている関係で、日本としても大切にしたいコミュニティであるとお話を伺いました。(講演要旨は別項に掲載)。

建部佳世さんのピアノ演奏はモーツァルトとベートーベンの分かり易い曲目が多く楽しい一夕でした。(別項参照)

幹事会記録

96年6月27日(木)出席者13人

1. 同好会活動報告

- *レディス会音楽会(96年6月21日)
参加者39人。収支¥17100赤字。
- *懇親ゴルフ(96年5月18日)
富士平原CC。参加者4人。
- *ハイキング会(96年6月29-30日)
尾瀬一泊旅行。参加者7人。

2. 次期代表幹事

MIT関係者へのコンタクトを神戸幹事に依頼。

3. 会報発行予定(96年8月20日原稿締切り)

4. 「ボストンへようこそ」幹旋頒布

100部頒布引受の報告あり。

5. 会員入会状況(96年11月以降)

3人。菊池徹さん、長瀬正人さん、間 徹さん。

6. 副代表幹事増員

新任候補 土居陽夫さん、近藤宣之さん。

96年9月3日(火)出席者17人

1. 次期代表幹事依頼経過報告

藤崎博也東京大学名誉教授・東京理科大学教授
(82/90年日本MIT会会長)紹介。

2. 次期代表幹事を1年前に選出する件提案。

次々期候補として高木政晃さんを決定。

3. 総会(10月25日)準備打合せ

NEC三田ハウス芝クラブ301号室を予約。

4. 会報第8号準備状況報告(9月末発送)

5. 副代表幹事増員 新任候補: 當間きよみさん。

6. メドフォード公立学校教員ホーム・ステイ受入 男性教員1名、女性教員2名、合計3名。

7. 会員入会状況(96年6月以降)3人

広中和歌子さん、藤崎博也さん、森 啓さん。

8. 次期幹事会(12月10日)

メドフォード公立学校教員来日の件

恒例になっているメドフォード教員3名(男性教員1名、女性教員2名)の来日スケジュールが11月12-26日に確定しました。11月16日午後の江戸博物館見学後から、翌17日昼帝国ホテル集合までの間のホーム・ステイの受入れにつき、ホストファミリーを募集しています。

問合せ: 事務局。

野崎佳世
野崎
芳家

日本ボストン会
— 第3回 ゴルフ大会の御案内 —

会員の相互親睦のために第3回ゴルフ大会を下記の通り開催致しますので、参加御希望の方は至急お申込み下さい。

記

1. 日 時 : 1996年10月31日(木)
 9:00 集 合
 9:48頃 スタート(予定)
 2. 場 所 : 泉カントリークラブ
 〒270-16 千葉県印旛郡印旛村吉田 (TEL 0476-99-1211)
 3. 参加費用 : 5,000円 (賞品代+パーティ代)
 4. プレイ費用 : 23,000円程度
 5. 参加人数 : 4組16人(先着順)
 6. 申込締切り : 10月4日(金)
 7. 申込先 : 日本ボストン会幹事又は荒金豊まで。
-
8. HDCP : ダブルペリエ方式
 9. 表 彰 : 優勝、2位、3位、4位、5位、7位、10位、ブービー
 ドラコン、ニアピン各ホール、ベストグロス

参加申込みをされた方には後日、地図とコース案内を送付致します。

以 上